昨年調査した越中中街道（中道）と本年調査の越中東街道（大東筋）との分岐点は舟津である。

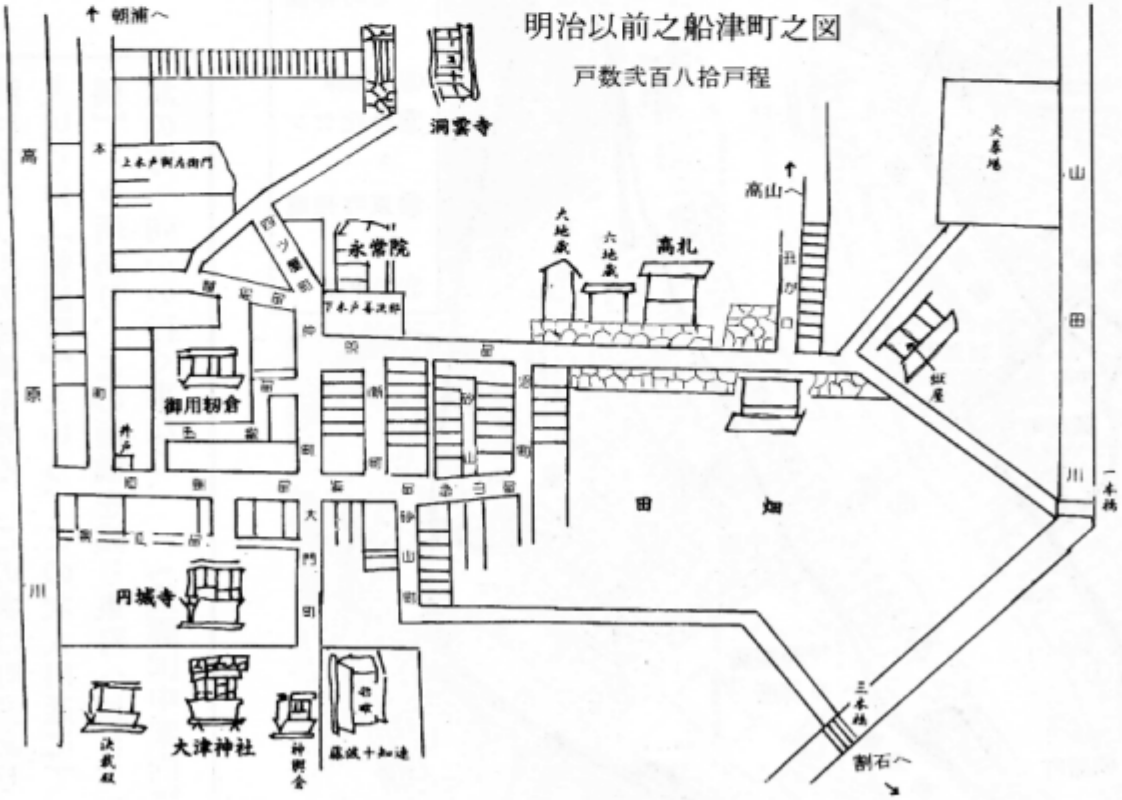
舟津の町のどこで街道が分かれていたのか。現在の大津通り（下の図の沼町）・仲町付近や西里二町目付近と思われるが、はっきりしたことは分からない。

舟津から東町へは、『飛騨国中案内』に書かれているように二つの橋を渡る。「あり川（蟻川）の板橋」と「藤橋」である。明治になって西里橋が架けられるまで、東町へは藤橋（江戸末期板橋化、現藤波橋）を渡るしかなかった。

大津通りや西里通り付近で中街道と分岐した大東筋は、本町通り―蟻川橋―朝浦町通りと進み、高原川に架かる藤橋を渡って東町へ出た。

現在、大津通りは仲町の角を過ぎ、蔵前の通りがまっすぐ本町のマルサンパチンコ店へと続いている。しかし、以前は、「なかいち」の前で少し右に曲ってＮＴＴの敷地の中を通って今村餅屋の前へ続く道だったと今村さんの話で確認される（下の絵図参照）。その旧今村餅屋あたりから、「八兵衛」の前を通り本町へ出る道は、昔のままであるとのこと。「なかいち」は、もと大森医院があったところで、江戸末期には下木戸善次郎（大森善次郎）が宿屋をしており、このあたりが街道筋だったことがうかがえる。

西里通りからは、西里と本町の三差路で本町に入った。この交差点付近には明治のころまで共同井戸があったと



明治以前之船津町之図（佐藤清嗣氏提供『神岡の地名壱』）をもとに作成

いう。

なお、このあたりには、伊勢町といわれる通りがあった。伊勢屋という伊勢神宮の「御師（おし）」が泊る宿屋があったことに由来するという（『神岡の地名　壱）』。永尾正一さんに案内していただいた（前頁の図参照）。

佐藤レコード店の向かいの細い路地に入る。このあたりに「なべ屋」があった。なべ屋は、江戸末期に旅籠を営んでおり、明治期には馬車宿として繁盛していた。

路地は、右折、左折、右折と三度曲って、仲町の稲葉医院の下手へ出る。その向かいは伊藤宅である。江戸末期には糸屋という宿屋であり、昭和期にも旅館だったという。

伊勢町の路地探索

このように、この付近一帯が宿場だったのであり、中街道との分岐点や東町への道筋を一つに固定することはできにくい。入り組んだ幾つかの道があったとしても、うなずけるものがある。

○御用籾倉と蔵前町

蔵前町は町の中央部に位置する。「明治以前之船津町之図」（前頁）を見ると、本町、伊勢町（今の西里一丁目南裏側の一角）と仲町に囲まれた真中あたりに、「御用籾倉」が描かれている。この「御用籾倉」の前にあたる通りであることから、蔵前通りの名が出来たといわれる。

「天保十四年（一八四三）、この年高原郷村村組合にて船津町村に百石五粒法の御倉建つ、今の蔵前の名これより出ず」とある（大庭利夫氏資料）。

大津通りの中林モータース中林久雄さんの資料によると「蔵前町は四〇軒あまりの家があり、蔵前組として組織されていた。その頭は組長と呼ばれ、今もその名残がある」という（明治二十八年五月の資料）。

○本町通り

奥田静平著『三井の桶』に、

「江戸時代から明治期にかけ、二十五山を中心とした栃洞坑の開発が盛大に進められておりました。多くの鉱山稼人を雇っていた鉱山主と、それに物資を供給した業者の多くは本町通りに居住しており、その状況を示すと次の図面通りであります」と書かれている（図は次頁）。

また、「当時は現在以上に人の往来は激しく、活気がみなぎっていたものと想像されます。当時船津町の財政を支えた資産家が、多く本町に居住しておりましたが、現在はそれらのいわゆる『だんなさま』が激減して数えるほどしかありません」と、本町の変容が記されている。